執筆者

★久保田正文
★司代隆三
★奥田美穂
★榎本健吉

歴史小説の旅

昭和37年8月5日　初版発行

¥. 450

著作者の了解により検印を廃止します

編者　亀井勝一郎

発行者　八谷政行

印刷者　植村喜一
第一印刷株式会社

写真印刷　梶原紫朗
大文堂印刷株式会社

発行所　株式会社 人物往来社
東京都千代田区丸の内2－8三菱仲12号館
振替・東京 151643 番

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　〔熊倉製本〕

亀井勝一郎編

歴史小説の旅

人物往来社

序にかえて

亀井勝一郎

「歴史小説の旅」というテーマは、私にとっても実に興味ふかいテーマで、自分も一度書いてみたいと思っていたところである。なぜなら、歴史が奥行の深さとともに立体的にあらわれてくる、同時に旅の面白さがそこに加わる、そこに新しい魅力が生ずるからである。

歴史小説はむろん虚構の世界だ。多くの作者が資料にもとづいたり、或は直接その土地を訪れ、構成とか人物についてのイメージを組み立てるわけだが、虚構の世界のもたらす夢を抱きながら現地を旅することは、さらにまた多くの夢を我々にもたらすであろう。実際とちがっている点もあろうし、また作者の虚構の独自性に気づく場合もあろう。豊かな勉強になることはたしかである。

しかし作品はこの場合はひとつの動機にすぎない。その地へ誘うための案内者と言ってもよい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

作品を読んでから、さて実際にそこを訪れたときの一種の「追体験」こそ本書の魅力である。つまり歴史の体臭といったもの、あるいは古人の血脈を感じさせるそういう場所に身をおくことで生きものとしての歴史を実感しうる筈だ。これが本書の告げている最も大切な点である。

資料の重要なことは言うまでもないが、それが展開された土地へ行くと、いままで気づかなかった様々のことがわかってくる。同時に自然も風景も町も、全く新しい眼で眺めるようになるものだ。歴史を通じてみたときの新しい発見が必ずあるにちがいないからだ。

この「歴史小説の旅」には現代作家の作品十四編がとりあげられているが、いづれも日本人にとってはなじみふかいものばかりである。また執筆者の久保田正文、奥田美穂、司代隆三、榎本健吉の四氏が、歴史と文学との接点という極めて微妙な問題に筆を入れたことについて私は同感を禁じえなかった。歴史と文学との関係は今までもしばしば論じられてはきたが、解決されているわけではない。

資料の正確さは大切だが、それにとらわれて生硬になりがちな歴史家と、自己の空想にとらわれて恣意的になりがちな文学者と、この二つに分裂する場合が多い。ほんとうは一つのものでな

ければならない。つまり史家の実証性と、詩人の想像力と、双方の融合の上に歴史は生きてくるのである。むろんこう言ったからとてそれを実現するのは容易ではない。しかし努力しなければならない大切な課題なのだ。史家にとっても作家にとってもそうである。

この場合、我々の堅くなりがちな心を柔軟に解きほぐしてくれるのが旅である。旅のもつ好奇心と、流転する心と、言わば研究と楽しみが一緒になるところに歴史の旅の面白さがあり、そのことは必ず読者の心にも伝わるであろう。そういう努力の結晶したのがこの本である。読者は原作を読んでから本書を読んでもいいし、その逆でもよい。いずれにしても歴史というものの豊かさ、多面性を味って頂ければ何よりの幸いである。そのための良い導きの出来たことを私は四氏に感謝し、また喜ぶものである。

歴史小説の旅・目次

序にかえて……亀井勝一郎……三
風林火山……九
恩讐の彼方に……三七
乱菊物語……四九
ハコネ用水……六九
磔茂左衛門……八九
天草四郎……一〇九

山の民……一三七
大石良雄……一五七
海の百万石……一七七
信　長……一九七
歴　史……二一七
井伊大老の死……二三七
唐人お吉……二五七
さざなみ軍記……二七七

甲信の山野を駈ける軍旗

海津城址の桜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

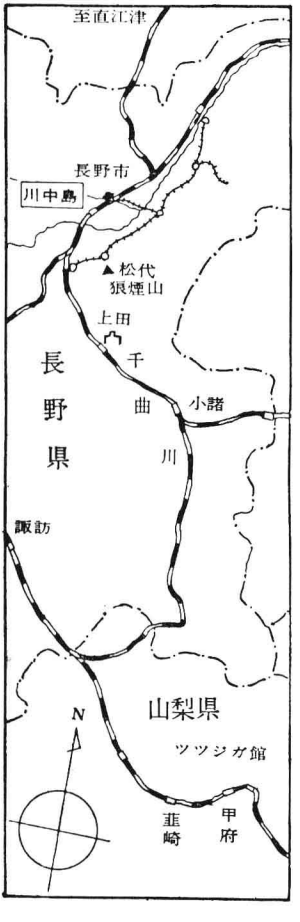
姥捨山より川中島古戦場を望む

川中島の雨宮の渡

謙信が斬り込んだ三太刀七太刀の碑

風林火山

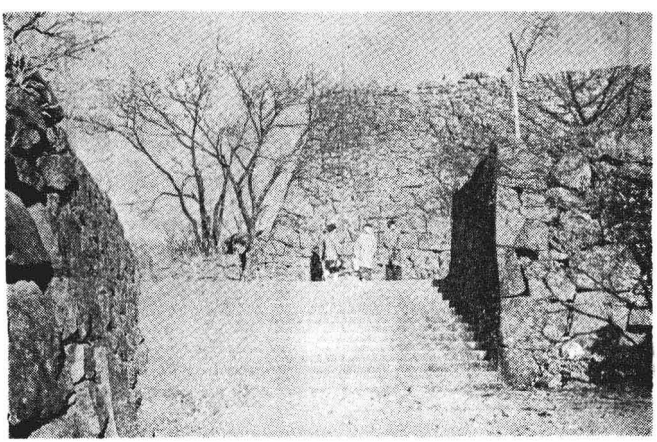
① 原作者／井上　靖
② 時　代／戦国時代（天文～天正の頃）
③ 場　所／山梨県・長野県
④ 交　通／中央本線・信越本線



東京を出た中央線の列車は、関東平野との境をなしている小仏峠を越え、相模湖を左手に眺めているうちに甲斐の国（山梨県）にはいるが、路線は深く段丘をきざみこみ峡谷美を見せながら流れる桂川に沿って、さらに上りをつづけてゆく。笹子峠からやっと下りになり甲府盆地へ突入するが、このすり鉢のような甲府盆地をのぞけば、甲斐は山また山の国である。甲斐の周囲には、南の富士山をはじめとして大菩薩嶺、甲武信岳、八ツ岳、駒

カ岳、仙丈カ岳、北岳など二千メートル以上の高峰が屏風のようにそびえ立っている。そこで甲斐の名は峡から発しているようにいわれているが、これは言語学的には誤りである。

甲斐の名は古事記に、倭建ノ命が東征の帰途通過しているくだりにも出ており、万葉集巻三にも「なまよみの甲斐の国　うち寄する駿河の国と云々」と長歌に詠みこまれている。このような地勢であれば甲府盆地は、冬は冷えこみ夏は暑く、空気は乾燥し降雨が少なく農業に適した土地とはいえないが、江戸初期の童謡に「甲州みやげになにもろた郡内しま絹、乾し葡萄」と歌われたように、古くから養蚕、機業、葡萄をはじめとする園芸作物の栽培がさかんであった。またこのような立地の悪条件が、甲州人を勤勉努力の人としてはぐくみ、甲州武士あるいは甲州商人の名に代表されるような気質を形成したといってもよかろう。そして甲州武士の象徴が武田信玄といえよう。この辺境地区ともいうべき生産力の低い甲州を本拠として、京都を目指す戦国大名たちと堂々と競



甲府城・大手門跡

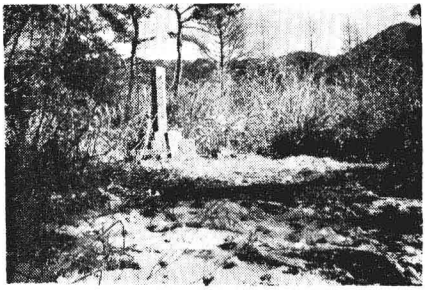
った信玄は、やはり傑出した人物といえよう。

信玄の死後、その子勝頼は織田・徳川の連合軍によって天目山に敗られ、名門武田家もついに滅亡の悲運を招いたわけであるが、甲州人の間には、いまなお信玄にたいする尊敬の念が失われてはいない。これは信玄が一介の武弁にとどまらず、施政家としてもなみなみならぬ手腕を有していたことによるものであろう。

武田信玄は、大永元年（一五二一）一一月三日、甲斐の守護武田信虎の嫡子として石水寺要害城（現在の甲府市積水寺）に生まれた。

武田氏は、代々甲州石和郷に住んでいたのだが、信虎は永正一六年（一五一九）に居館を躑躅ヶ崎（甲府市古府中）に構築して移った。そして翌年に要害城を築いた。

武田氏は新羅三郎義光を始祖とする甲斐の名門で、義光の子清光のときから甲斐に定住し代々守護となったが、国内の土豪の反乱にあい家運は傾いていた。永正年間に信虎がそれら土豪の反乱を鎮圧し、ようやく武田家再興の機運が見えはじめてきた。しかし、信玄の生れたころは、なお侵略してきた今川氏親（氏家の父）の軍と交戦中であった。そのために信虎の夫人は居館から要害城に難を避けていたのである。



要害山にある信玄生誕碑

信玄は、はじめ勝千代と命名されたが、『甲陽軍鑑』は「大将くしま（遠江土方城主福島兵庫頭正成）を討ち取りしその日その時信玄公誕生故へ稚名を勝千代と号す」と記している。

十六歳で元服し、室町将軍足利義晴の一字をもらって晴信と名乗った信玄は天文（てんぶん）一〇年（一五四一）六月、二十一歳のとき、武田家第十九代の当主として守護に任ぜ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo